

おじいさんの白いひげ

なかじょう ゆき

それは、みさとがほんの小さかったころのおはなしです。

そのころ、まだ、いなかの村には、「どそう」「どそうならわしがありました。どそうとは、しんだ人のなきがらを、やかずに土につめることです。

おじいさんがなくなったというしらせをうけて、おとうさんとおかあさんとみさととは、ひとばんじゅうきしゃにのって、いなかのいえへやってきました。

おぎしきには、白いきもの人たちがあつまって、すわっていました。おとうさんたちもきものにきがえましたが、みさとだけは白のワンピースでした。

おじいさんも白いきものをきて、木のおかんの中に、まっすぐにねていました。おじいさんのあごには、むねまでとどく、ながい白いひげがありました。

あかちゃんのところから、おじいさんにだっこされると、みさとはこのひげをひっぱったり、ゆびにくるくるまいたりして、キャッキヤとわらいました。すると、おじいさんも「はっはっはっ」と大きなこえでわらいました。

だからきょうも、みさとはおかんの中のひげを、そうつとなでてみました。ひげはやわらかくて、さらさらしていました。でも、おじいさんはわらってくれませんでした。そして、そのかおは、きいろくてとてもつめたくなっていました。

みさとはあわてておかあさんのほうへかけると、せなかにしがみつきました。

おぼうさんが来られて、おきょうをあげました。おきょうがおわると、おとなたちはおかんをかついで、にわへ出ました。

おぼうさんがいいました。

「しんだ人のきもちがのこるといけないので、おかんをうめおわるまで、けっしてはなしをしたり、ふりかえったりしてはいけません」

おかんを先とうに、白いきものれつが、山の上のぼちにもわかってすすみはじめました。みさとも紙の花をもたされて、おかんのよこについていきました。

歩きながら、みさとはさつきのおぼうさんのことばばかりかながえていました。

きもちがのこるって、どういうことなんだろう？ ふりかえったら、なにがおこるんだろう？

田んぼのあぜをとおって、山みちにさしかかりました。しばらくのぼっていくと、みちの右がわがくずれていました。その下を見ると、白いヤギが一びき、うるうるしていました。

どうして、あんなところにいるの？ ヤギはこっちへのぼりたがっているのかしら？ みさとはもう少しヤギを見ていたいとおもいました。でも、おかあさんに手をひかれるまま、だまってぎょうれつについていきました。そしてまた、おぼうさんのことばを、かながえはじめました。

きもちがのこるって、どういうことなんだろう？ わたしのつしらはどうなっているんだろう？

みさとは、つしらのことが気になって、しかたなくなっていました。ぎょうれつはもうじき、

おはかについてしまいます。

みさとは、おかあさんの手をすっとはなすと、かがんでじめんに紙の花をおき、くつひもをしばりなおすふりをしました。

ぎょうれつの人たちは、みさとのほうを見ながらも、ふりかえったり、はなしかけたりせず、そのままとおりすぎていつてしまいました。

みながとおりすぎたところで、とうとう、みさとはうしろをふりかえってしまいました。

見はるかす、いちめんの田んぼに金色のいなほがみのり、かぜがとおりかざるたびに、なみだっていました。いなほのなみからは、

光があふれかえり、こい青い空にまいあがっているようでした。

おじいさんのいえがありました。

おじいさんの心が、あのいえを出て、このけしきの中をたちのぼっていくようにおもわれて、

みさとはいきをのみました。

「おうい、みいちゃん」

だれかのよぶ声が出て、みさとはかけていきました。

おじいさんのおかんは、大きくほられたあなにおさめられました。みさとはもっていた白い花を、おかんの上にそつとなげいれました。

おかんは土でうめられました。

みんなはわらわらと、もときたみちをもどっていきました。

みさとは、まだくろくろとして、おはかの土を見ていました。そのときになってはじめて『しまった』と、きづいたのです。

じぶんがふりむいたせいで、おじいさんのきもちが、あのけしきのどこかにとりのこされてしまったんじゃないかしら。みさとのむねは、どきどき、どきどき、なりだしました。「みいちゃん、さあ、かえるよ」

おかあさんがよびました。

みさとはおかあさんの手をぎゅっとにぎって、山みちをくだっていきました。

ふもとを見るのがとてもこわい気がしました。ふと、まえを見ると、あの白いひげのヤギが、みちまで上がってきていて、金色に光る目で、みさとのほうをじっと見つめていました。そのとき、みさ人には、このヤギが、かみさまのつかいのようにおもわれました。おじいさんのようにも見えました。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

みさとは心の中で、たくさんあやまりました。でも、あやまったら、かみさまはゆるしてくださるのでしょうか？

わたしが、ふりむいたから。

かみさまは、なにかばつをおあたえになるにちがいない。おじいさんも、おこっているにちがいない。

どうしたら、かみさまのきもちが、わかるのでしょうか。みさとはおかあさんの手をはなし、立ちどまって、いっしょうけんめいにかんがえました。

白いひげのヤギが、みさとのほうへ、一歩、二歩、ちかづいてきました。金色の目でみさとをじっと見ています。

そうだ。わたしがあげた草を、ヤギがたべてくれたら、かみさまがわたしをゆるしてくだ

さうたつてことにちがいない！

そこでみさとは、そこらに生えている赤つめ草をつんで、おそろおそろヤギにさしだしました。

ヤギは、くびをのばしてきました。そしてふるえるみさとの手から、草をむしゃむしゃたべはじめました。

みさとは、こわごわ、もういちどヤギのかおを見ました。ヤギの目はやさしくなっていて、ここにことほほえんでいるようでした。みさとはそうつと、ヤギの白いひげにさわりました。とてもやわらかで、さらさらしていました。

「よかったあ」

きゆうに体がかかるなくなった気がしました。みさとはうでをつばさのように広げ、はばたきながら、ふもとまでかけおりていきました。

(おわり)